

令和3年度 第1回下野市小中一貫教育推進協議会 議事録

審議会等名 令和3年度 第1回下野市小中一貫教育推進協議会
日 時 令和3年7月8日(木) 午後3時00分～午後5時00分
会 場 下野市役所 3階 教育委員会室
出席者 倉井典子 委員、秋山貴子 委員、梶原和子委員、塩沢建樹 委員、
影山政夫 委員、小杉満理子 委員、藤沢修一 委員、中祖 光隆 委員、
川井保明 委員、伊沢幸子 委員、小倉康延 委員、小野瀬善行 委員、
渡邊欣宥 委員、平石勝美 委員
【欠席委員】瀬端徹 委員
市側出席者 石崎雅也 教育長、近藤善昭 教育次長、
(事務局) 田澤孝一 学校教育課長、稲葉亜希恵同課課長補佐兼指導主事、
森口哲二 同課主幹、上野保久 同課小中一貫教育統括コーディネータ
ー

公開・非公開別 (公開) ・ 一部公開 ・ 非公開)

傍聴人 0人

議事録(概要) 作成年月日 令和3年7月9日

1. 開会(田澤課長)

2. 委嘱状交付

3. 教育長あいさつ

4. 委員紹介(自己紹介)

5. 会長、副会長選出

会長あいさつ(小野瀬会長)

ただいま会長職を拝命いたしました、宇都宮大学の小野瀬でございます。昨年に引き続き、会長を務めさせていただきます。委員の皆さまのご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

副会長あいさつ(渡邊副会長)

副会長に指名されました渡邊と申します。私は、グリーンタウンコミュニティ推進協議会という組織の中で、学校とはエコライフ祭という地域行事を通して連携をとりながら、生徒児童の参加協力をしていただいております。何かしらお役に立てたらと思っております。よろしくお願いいたします。

(田澤課長) 議事に入る前に、本協議会設置の趣旨及び小中一貫教育ハンドブックについて、事務局より説明いたします。

(森口主幹) [事前配付資料：本協議会設置の趣旨について説明]

(田澤課長) ただいまの本協議会設置の趣旨について、ご質問等ございましたらお願い

します。

(影山委員) 今の説明の資料には、「下野市ならではの小中一貫教育になる」とありますが、これについては何か具体的なイメージはお持ちなのですか。それとも、こういう場を通じて、「下野ならではの」を探していこうということなのでしょうか。

(稲葉補佐) 「小中一貫教育ハンドブック」をお持ちでしょうか。具体的には、平成19年度に、「下野市の小中一貫教育の取り組み」というということで、ハンドブックの中に提示してあります。具体的にどういう視点で進めていくかということについては、6ページに記載があります。そこに、視点を4点に絞ってあります。一言でというお答えにはならなくて申し訳ありません。

(影山委員) 一言で言うとどのようなことなのかなと思ったものですからお聞きしました。何をするかというよりも、こういう教育にしたいのだということがあるのではないかと思ったものですから。

(田澤課長) 「下野市ならではの」という視点から、皆さまからご意見がいただければありがたいです。

それでは、ここから小野瀬会長に議事進行をお願いいたします。

6 議事

(1) 本年度の各中学校区における推進内容について

(小野瀬会長) 本年度の各中学校区における推進内容について、本年度の計画、進捗状況等を説明いただいて、それに対してご議論をしていただくということになると思います。まず、推進計画等からご説明願います。

(稲葉補佐) [資料:「2019～2021年度 下野市小中一貫教育推進計画」、「下野市小中一貫教育」、「令和3年度下野市小中一貫教育成果指標に関する評価」について説明]

(小野瀬会長) ただいま、事務局の方から下野市小中一貫教育の計画等について説明がありました。皆さまから質問または確認等ございますか。

それでは、各中学校区の代表委員より説明をお願いします。なお、ご質問等は全ての説明が終わってから一括してお受けしたいと思いますので、よろしくをお願いいたします。

(倉井委員) [資料:下野市小中一貫教育グランドデザイン(南河内中学校区)について説明]

(秋山委員) [資料:下野市小中一貫教育グランドデザイン(南河内第二中学校区)について説明]

(梶原委員) [資料:下野市小中一貫教育グランドデザイン(石橋中学校区)について説明]

(塩沢委員) [資料:下野市小中一貫教育グランドデザイン(国分寺中学校区)について説明]

(小野瀬会長) ただいまのご説明ご報告に対して、皆さまからご意見等をいただこうと思います。4地区の目指す子ども像が示されておりました。それぞれの中学校区において、小中一貫で進める形、施設分離型で進める形、隣接型で進める形、それぞれの地区の形があったかと思います。その中で、どういうことをねらいとするのか、それに基づいてどのような活動をしているのかという

説明もあったかと思えます。皆さまから、ご意見ご質問がありましたらお願いいたします。

(伊沢委員)

私は、教育に関しては少人数で行うのがいいと思っています。18人がベストと聞いたことがあります。年々子どもも少なくなっているということもあるので、私の理想としては、1クラスの人数を20人にしてほしいと思っています。国の基準があるのでなかなか難しいとは聞いていますので、20人クラスが無理な場合は、学力差のある子どもを分けて指導してもらえたらと思っています。算数などは、理解できないままに進んでしまうと、他の友だちについて行けなくなるので、理解度に合わせた指導が必要になると思います。特に算数がその傾向にあると思います。私の子どもは、国分寺西小学校出身で、上の子は20人台、下の子は10人台でしたが、先生も教えやすい人数であったと思います。親としても、少人数クラスの良さを感じています。

また、子どもたちの登下校の安全面について、千葉県の交通事故のニュースで、いろいろと考えさせられました。国分寺西小地区は、スクールバスになりましたが、利用児童が増えて、バスに乗りきれなくなっていると聞いていますので、対処していただきたいということと、国分寺西小地区の児童よりも登下校の距離が遠いのに、歩いている児童もいて、スクールバス乗車を考えてもらいたいと言っている保護者もいるので、対処していただきたいと思います。今話題の事故も、スクールバスに乗っていれば、あのような事故に遭わないで済んだのではないかとも思いました。ぜひ検討していただきたいと思います。

(小野瀬会長)

「定員が決められていますので、1クラスの人数を減らすということは難しいと思いますが、クラスの枠組みを超えて習熟度別学習や、少人数の指導を行うのはどうですか」という提案であったと思います。また、千葉の痛ましい事件もありましたけれども、中学校区で、登下校の通学路の安全面等の共有の例があればお願いします。バスの運行につきましては、事務局から補足があればお願いしたいと思います。加えて、各学校で少人数の授業をやっていますよという事例があれば出していただきたいと思います。

(藤沢委員)

安全面では、石橋中は、中学生になると全員自転車になりますが、他の中学校ではどうでしょうか。たぶん半分以上は自転車通学に変わっているのではないかと思います。そうすると、自転車に対する安全性、これはもう保険制度も含めて徹底的にやらねばならないと思います。教育委員会がそういう手順を作って考えねばならないと思います。自転車が体に合わなかったり、運転技術が未熟であったりしている状態をどうするか等を考えねばならないと思います。歩道を自転車の通学路にしていることについても、学校だけではなく、教育委員会が考えていかなければならないと考えます。教育委員会だけではないかもしれませんが。

(小野瀬会長)

安全面については、新聞でも栃木県内の自転車の交通状況について取り沙汰されていましたが、保険の適用の問題も含めて、具体的な議題を立てていかねばならないかと思います。それは、中学校区だけでなく、市内全域での取り組みが必要であるということでした。他にございますか。

- (小倉委員) 忙しい先生方が、これをやるということに驚いています。相当の労力とエネルギーがいると思います。これによって、本来の力を入れるべきところに力が入らず、不登校等の問題にまで手が行かなくなるのではないかと、これに乗り切れない子どもがいるのではないかと、少し不安もよぎりました。そういう子どもたちを取りこぼさないようにしていただきたいと思います。積み重ねてきたところの、プラスアルファが大事なのではないかと思います。
- (小野瀬会長) 教職員の働き方改革が課題としてある中で、地域の力を借りながら教育を進めていくというところと、この小中一貫教育の考え方は一致する所があると思います。一方、9年間という連続した教育が、子どもたちに9年間もあるのかと思われてしまわないように気をつけねばならないということも大事な視点であると思います。
- (小杉委員) 関連する意見として、落ちこぼれる、授業について行けない子もいると思いますが、学校からは、「家庭教育を夏休みはしっかりしてください」と言われ、塾に行っって追いつこうという家庭もいらっしゃると思います。しかし、そういうことに気配りできないような家庭や、やりたくても実践できない家庭もあると思います。地域には、教えられる方や引退した先生がいらっしゃるのでもし可能であれば、教育委員会が主催して、学びの補習ができる場があるとよいと思います。小学校の時には、ついて行っていると思っていたのに、中学校に入って大きく環境が変わり、宿題も多くてついて行けなくなる子もいるのではないかと思います。それが今回、4-3-2の区分の5年生の時に、基礎学力が付いていない子がある程度わかつて思うので、その段階で補習をしてあげられれば、中学生の年齢になった時に、授業について行けなくなるとか、そのために学校が嫌いになるとか、勉強ができないことによって、学校は好きなだけ行けなくともか、無くなると思います。できるだけ、市として取りこぼしがないように対応していただきたいと思います。勉強ができなくていいという子はいないと思いますが、やり方がわからない子もいると思います。そうかと言って、学校の先生はとても忙しいので、学校の先生に更にやってくれというお願いはしたくありません。地域の人を活用して、学校単位でなく、市としてフォローしていただけるような仕組みを考えていただけたらと思います。
- (小野瀬会長) 小中一貫教育、小中連携の目的の一つは、下野市に限らず、「中1ギャップ」といういろいろな意味での「つまずき」をゆるやかにしていこうということです。その中で良いフォローができたらいいいという大事なご意見でした。
- (中祖委員) 「グランドデザイン」は、市の学校教育目標にしたがって、教育活動が述べられていると思いますが、非常に力が入っていると思います。地域の特色とか地域の様子とかの説明を聞いていますと、全く問題がありません。すばらしいのではないかと思います。しかし、逆に言えば、課題が見えてこないと言えると思います。グランドデザインは、もっと課題を示し、ここをこうしたいのだということを述べたらいいいのではないかと思います。そうすれば、もっと議論ができるのではないかと思います。また、地域との関わりをもつということで、地域の清掃という話がありましたが、多くの生徒は学校から

やれと言われているから掃除をしているのではないのでしょうか。地域の清掃によって地域を好きになるかといったら、ちょっと違うのではないのでしょうか。南河内二中は「郷土」を「日本」と捉えていることはよいと思います。子どもたちには、歴史をもっと深く教えることが大切かと思います。例えば、下野市はたくさんの遺跡が出てきます。日本はやっぱりすごいなあと思わせることが郷土愛になるのではないかと思います。もう一つ、「学力の向上」ということを石橋中だけが課題として取り上げています。「わかりやすい授業」を目指しますということですが、「話す・聞く」ことを指導することが先ではないかと思います。小中一貫なのだから、幼稚園の時や小学校低学年の時というように、段階を追って、話し方を指導していくことが必要だと思います。話す・聞くことの向上があってこそ、「わかりやすい授業」が成立するのではないかと思います。また、国分寺中のグランドデザインに示されている「中1ギャップ」について調べたところ、今全国でも非常に問題になっているということです。他の中学校では問題になっていないのかなと思ったら、説明の中に出てきました。すでにやられていることかも知れませんが、下野市内の学校間で横のつながりをもっとよいと思います。

(小野瀬会長) 地域学習というものの意義について、学力の向上の中身の精査、課題を示し議論すべきということでした。

(影山委員) 市ならではの目指すところは、端的に言うとも6ページにあるところということでした。ハンドブックに示されていることは、日本全国どこへいってもその通り目指すところだと思います。お聞きしたかったのは、先生方が思っている目標に対して、現状はどうなっているのかということです。親が、自分の子どもはこうなってほしいという思いがあるように、先生方も教育者として、どうしたいということがあると思います。栃木県は、比較的温暖で住みやすいところであり、災害も少なく非常に安定したところだと思います。下野市というところも、古くから東山道等があつて非常に発展したところですから、とても安定したところなのですが、逆に言うと、都会に比べれば、刺激が少ないと言えらると思います。そういうことを含めて、先生方に、もう少し、「こういう学校にしたい」という目指すところがあつてもいいような気がします。「下野市小中一貫教育成果指標に関する評価」の説明がありましたが、やはり、最終的に評価していくのはこういうものとは思いますが、私は、地域を知って、世界に向かって飛び立つ子どもたちの教育は、「将来はこうなりたいということをも9年間で見つけさせる」ような指導、教育ができて初めて完結するような気がします。それも人それぞれで、目標も違うし、9年間では見つかからない子もいると思います。そのためには、次のステップに行く時に、対応できるような基礎学力を上げていかなければならないと思います。そう考えると、もう少し評価するものがあるような気がするのです。そういうことを皆さんで議論していったらどうかと思います。

(小野瀬会長) 成果指標に関するご意見で、どのような評価が必要かというご意見をいただきました。現場の先生方が9年間でこういう子どもたちを育てる。その中の小学校低学年、高学年でどのような力をつけていくかを考えることで、実践の手応えの共有や生じたギャップを救えるような手立てが考えられるの

ではないかというご意見かと思えます。

(藤沢委員)

地域との関わりの点で、評価が低いと思えます。昨年はコロナの関係で、やりたくてもできない状況でしたので、この評価でいいと思えます。これから先は、このコロナの中で、本当に何かできないのだろうかということ、子どもたちあるいは地域がもう一度考えなければならぬ時期に来たのではないかと思えます。今までは、「集合型」ですとか「遊びから」ですとかのやり方でしたが、もう少しレベルを上げるとか、もっと違う意味の地域を作っていかなければならないと思えます。実情をお話ししますと、こども会も、老人会も、自治会もみな衰退の方向にあります。これは別のところで討論しなければいけないと思えますが、それをどうやって食い止め、上げるかということが鍵になります。こども会、老人会、自治会等、それらがあってこそ初めて地域だと思えます。ありがたいことに、下野市はよくつながっている方です。だから、そこを大事にするためには、もう少し、地域を補強しないといけないのかなというのが私の実感です。

(渡邊副会長)

「全ての子どもの学力を向上させて、ある一定レベル、全国平均よりも上のレベルを目指す。」これほど子どもに重圧を与えていることはないと思えます。学校生活の中で、勉強すること、仲間を作ること、上下関係を学ぶことは、子どもの成長のためには大切なことです。その中で、勉強ができない人間が、できるようになれと努力を強いられることほどきついものはないと思えます。私は、勉強はできなかつたけれども、社会の中で生きていくすべを地域の人たちに教えてもらい大人になりました。よい友を作り、それなりの生活ができ、幸せです。一律に勉強のできる子を作るのではなく、できない子は、違う面で活躍する場をつくってやる、子どものよい面を見つけて伸ばしてやるのも学校の教員の役目だと思えます。成績のいい人はどんどん伸ばしてやり、成績が悪くても、その子の長所を見つけてあげて、よい方向に向けていただきたいと思えます。先生に全てやれというのは無理ですから、そこに関わるのが、われわれ地域の人間だと思えます。先ほどのご意見では、地域の清掃活動について嫌々やっているという話でしたが、私も何年か小・中学生と一緒にクリーン活動をやりました。子どもさんたちは、ものすごく楽しんでいました。実際に参加してみたいと思います。嫌々やっているという子どもさんは極めて少ないです。皆、嬉々としてやっています。なぜか。授業より楽しいからです。

(小野瀬会長)

これは国が施策として小中一貫教育を掲げる時に、単純な受験学力を上げるため、受験競争の低年齢化であってはいけないということは前提としました。ただいまの渡邊副会長のご意見は、社会の中で生き抜く力をいかにつけるかも大切であり、それに地域がどう関わるかということでした。平石委員、何かご意見がありましたらお願いします。

(平石委員)

私も教育に携わってきましたが、昔の教育も今の教育に通用することはたくさんあると思っています。教育の基本は、「不易と流行」です。保護者や地域の人々の考えを吸収して、生きていくために必要なものは何かということ、をきちんと教えていくのが学校であると思えます。これを、声を大きくして言えるか言えないかが問題だと思えます。示された「グランドデザイン」、

この計画そのものは絶対にいいと思います。実践の時に、職員の中にも子どもの中にも、家庭の中にもぶれる人がいると思いますが、ぶれないために「グランドデザイン」があると考え、実践を進めていただきたいと思います。最後に質問ですが、この小中一貫教育は文科省からの提言が最初ですか。

(小野瀬会長) 「不易と流行」という理念から、子どもたちも社会の一員として見極めていくことが大切というお話でした。小中一貫教育の提言については、後で、事務局の方から回答をお願いします。まだ、ご発言をいただいていない川井委員、いかがですか。

(川井委員) 吉田地区の学校は単学級で10人前後の人数ですが、その中でも、多動の症状をもつ子、勉強面で行けない子等、以前に比べ多くなった気がします。自分の長男も、少人数だからこそ先生方に救われたと思っています。来年から南河内小中学校になりますが、その時に、先生方がどこまでサポートしていただけるのかということをお心配しています。

(小野瀬会長) 小中一貫型におけるサポート体制を含めた見直しが必要とされるということでしょうか。

(倉井委員) いろいろご意見をいただいた中で、私もどこまでお話ししたらよいかと思うのですが、4つの学校区ではどこでもやっていることですが、小学校、中学校の教員が一堂に会して話し合いをしています。小中のギャップであったり、勉強を苦手とする子への対応や困り感であったりとか、もちろん保護者さんに承諾を得なければならない場合もあるのですが、小・中学校に入ってきてもつまずきがないように、授業内容についても話し合っています。また、個々のお子さんについても情報交換をしながら一緒に話し合っています。本校は習熟度学習はやっておりませんが、どこの学校でも、学力差の解消のために、話し合い活動を行ったりして、一人で考えるのではなくて、児童生徒は教え合いながら学習する形態も実施しています。また、中学校は、「生き生き学び塾」という市主催の学習相談の場も夏休みに設けていただいております。学力向上のために、子どもたちのためによりよい方法を考え、いろいろな方策をとりながら、小中一貫教育を進めております。全て言い尽くせませんが、そういうことをご理解いただきたいと思います。

(梶原委員) どの地区も、これをやるのが目的ではなく、あくまでも手段として行っております。特に石橋地区などは不登校等の問題をだいたい抱えています。それを課題として、少しでも解決していこうという共通の目的をもって進めておりますので、これがあるから先生方がつぶれてしまうのではないかとこの心配はありません。学級の人数につきましては、確かに少ない方がきめ細やかな指導はできるということはあると思いますが、大規模校は大規模校で、活気があっていいところもあります。私たちは、それぞれの地域、積み重ねてきた学校の歴史、風土等に応じた教育を粛々と進めて、それをより良くしていくというのが使命だと思い取り組んでおります。どうか、あくまでこれらはやるのが目的ではないということをご理解いただきたいと思います。

(小倉委員) せっかく一貫校ができるのであれば、余裕のある先生がたくさん出て、もっときめ細やかな教育が実施できるように、逆転の発想で、削るのではなく

て、先生方がよりやりやすくなるためのいい材料だと思って、行政側は予算をたくさん付けて、学校がやりやすくしていただきたいと思います。小中一貫教育は、今までより子どもたちの教育がやりやすくするためのものと考えていい訳ですね。

(梶原委員) 準備には時間がかかるかと思いますが、専科教員とか、少人数加配とかいうものもどんどん進んでくると思いますので、そうなると、小学校教育も変わってくると思います。

(石崎教育長) 小中一貫教育は、間違いなく、文科省が強く押し進めているものです。将来あるべき学校の姿ということで進めています。ただし、誤解しないでいただきたいのは、小中一貫教育は独立したものではありません。地域学校協働活動、あるいは学校運営協議会、これとセットのものでございます。学校だけで完結するものではありません。学校を核として、停滞気味の地域、家庭を健全な形に戻すというのが、将来あるべき学校の姿であって、将来あるべき社会の姿を目指しているものです。学校が荒れた時代、地域の協力のお陰で子どもたちが変わった例もあります。地域の力、保護者の力は大きいものがあります。その力で学校を助けていただきますし、その力を発揮することで地域がまとまり、保護者がまとまって、古き良き日本の姿が戻るものというところが目指すところです。それを踏まえて、今後ともご意見等をいただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

(小野瀬会長) 本年度初めての会議で、いろいろなご意見が出ており、良かったのではないかと思います。(1)についてはよろしいでしょうか。(2)の「その他」にいきたいと思います。事務局からお話があるということです。よろしく願いします。

(田澤課長) [南河内小中学校について説明]

(小野瀬会長) ただいまのご説明について何かございますか。

皆さまのご協力の下、本日予定しておりました議事は終了しました。ありがとうございました。